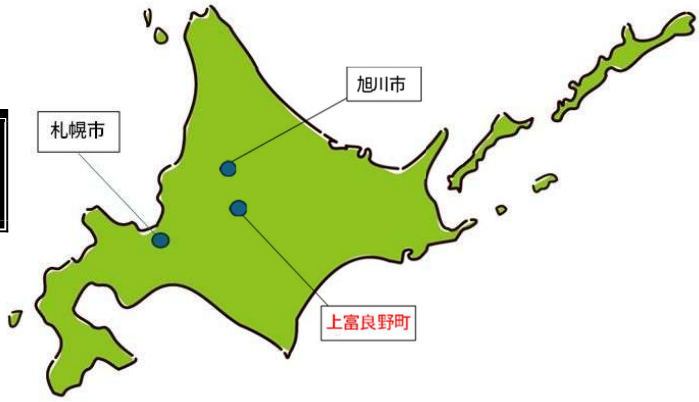
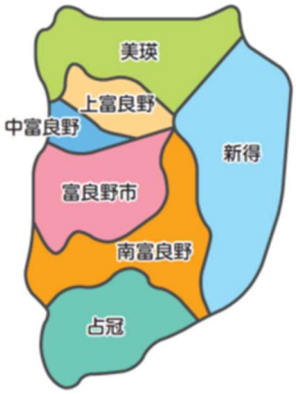
終わりなき図書館ジャーニー vol. 55



上富良野町図書館ふれんど

第１回「終わりなき図書館ジャーニー南富良野町編」で「富良野」という名前の自治体名が４市町あるということ。そしてそれぞれの関係について書きました。
今回は「富良野グループ」の中で一番北に位置する上富良野町です。
旭川から JR で美瑛を越え次の大きな町が上富良野です。日本で最初にラベンダー栽培したこの町の人口は、9300 人ほどです。



図書館は上富良野駅から徒歩 12 分ぐらいです。
1970（昭和 45）年、町政の重点事業の一つとして公民館の建設が計画され、翌 46 年竣工式が行われ、公民館図書室として 1972（昭和 47）年から毎週土・日に開館され蔵書数は約 2300 冊から始まりでした。
2005（平成 17）年、公民館１階を改築して上富良野町図書館、愛称「ふれんど」が開館します。
入館するととにかく賑やかな図書館です。それは児童書の配架位置にあります。児童書を館内全体の壁面や窓際などに揃え、その真ん中一般書に配架しているのです。これは道内では結構珍しいスタイルかもしれません。保育園が図書館に隣接していることも理由かもしれません。図書館員、利用者誰もうるさい！と言いません。子どもたちの元気がもらえるような空間です。地域おこし協力隊も図書館員として活躍しています。

いつものように地域資料の書架に行くと、国内最大級の面積であるファーム富田ラベンダーイーストの案内などラベンダーに関する資料が揃っています。上富良野町公式 HP によると、「ラベンダーは地中海沿岸原産のシソ科の常緑性低木で多年生植物です。学名ラヴァンデュラ（Lavandula）の語源は、ラテン語の洗う（lavo）に由来すると言われています。」
メロンをはじめ、トマト、アスパラガス、ホップの栽培により上富良野町産ホップ 100%のビールも作っています。

さて今大きな問題になっているのは十勝岳噴火が一体どのようになるかです。この原稿を書いている段階ではレベル３となっており、吹上温泉などは避難するよう指示されています。市街地への避難という段階にならないとは決していえない歴史的背景があります。
十勝岳は 1857（安成 4）年、1887（明治 20）年、そして 1926（大正 15）年大噴火しています。今年は「大正泥流 100 年」ということで当時を振り返る啓蒙活動を行っている中でのタイミングです。

1926 年の大噴火は多くの犠牲者を出す有史以来最大の大災害となりました。まず中央火口丘の西側で噴火が起こり小規模な泥流が発生。その後中央火口丘の西半分を崩壊させるほどの大噴火が起き、熱い岩屑なだれとなって斜面を流下しました。それが周囲の残雪を急速に溶かし、大規模な泥流を誘発して大惨事を招きました。上富良野・美瑛·中富良野（当時は村）に甚大な被害を受け死者·行方不明 144 人、罹災戸数 482 戸という規模でした。『北海道の図書館員が薦めるブックガイド』上富良野町からの推薦資料は『十勝岳だいふんか ～未来へつなげよう～』制作・よみきかせ会ムーミン 絵・菅井茂樹 発行石田製本（2018 年発行）という絵本です。1926 年の大噴火の様子が大変リアルに描かれている絵本なので、是非機会があったら手に取ってみてください。

その後 1962（昭和 37）年噴火。噴煙が高さ 1 万 m あまりに達し、死者 4 人、行方不明 1 人、負傷者 12 人という被害を受けています。1988（昭和 63）年の噴火は、町内の白金地区に避難命令。住民、宿泊客、ホテルや旅館の従業員 176 名で、待機中のスクールバスや各ホテルのバスなどに分乗し、25 分程で国立大雪青年の家に避難したそうです。

このように十勝岳の噴火周期から考察すると、いつ噴火してもおかしくない時期ですが、できるだけ小規模を願うばかりです。十勝岳においては上富良野町だけでなく隣の美瑛町と連絡を常時取り合っていますし、今回の警戒対象自治体は富良野市、南富良野町、新得町などにも広がっています。

北海道にはいつ噴火してもおかしくない火山が多いです。胆振の有珠山もいつ噴火してもおかしくないでしょう。

火山による被害も地震同様この国では災害が多発しています。どの災害も自治体という枠を越え、地質、風向きなど色々な要因で災害が異なります。九州でもたくさんの噴火がありましたよね。個人的に東京、大阪、名古屋、札幌など大都市は火山噴火に対して意識が少し低いなと感じることがあります。もちろん富士山が噴火したらこの国は東西分断してしまうかもしれません。地震、噴火、豪雨など自然災害が全国で多発しているだけに、人間の力だけではどうにもならないですが、発生後の対策は徹底してもらいたいと強く願います。

2024 年 2 月訪問

加藤　重男